

高槻市

梶原古墳群

主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路側道工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一五年七月

公益財団法人 大阪府文化財センター

2015年7月

公益財団法人 大阪府文化財センター

高槻市

梶原古墳群

主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路側道工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

序 文

本書は、当センターが高槻市萩庄区内で平成26年度に行なった、主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路側道工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

今回報告する梶原古墳群は、高槻市東部で北摂山地が平野部に張り出す斜面上にあります。南東には淀川との間に狭隘な平野がありますが、この地は古くから山陽道・西国街道などの幹線道が通り、淀川の水運と共に交通の要衝として知られていました。

北西には安満山古墳群があり、その中の安満宮山古墳は「青龍三年（235年）」銘の方格規矩四神鏡と最古型式の三角縁神獸鏡が出土した事で知られる古墳です。

南東隣の山裾には、飛鳥時代創建で高槻市最古の寺院である梶原寺跡があります。この寺院は東大寺創建時に瓦を供給した寺院として知られています。

紀貫之が「土佐日記」の中で、土佐から京への途次で宿泊したと記す「鶴殿」は古墳群から見下ろせる高槻市道鶴町にその名を留め、淀川の河原の「鶴殿の草原」は、長らく宮内庁雅楽部へ楽器の材料として納める草の産地でした。

山地の西部にある金龍寺旧境内跡は、延暦9年（790年）創建と伝わる寺院の跡で、古くから桜の名所として知られ、能因法師や西行、松尾芭蕉なども参籠しています。

その参道も兼ねる「太閤道」は、羽柴秀吉の軍勢が「山崎の合戦」に向かって通った道で、今も市民の手軽なハイキングコースとして親しまれています。

梶原古墳群は、名神高速道路拡幅工事に伴い、平成3年から平成5年にかけて18基の古墳が調査され、豪華な馬具を副葬し、立派な家形石棺を持った横穴式石室などが発見されています。

今回、名神高速道路の側道となっている主要地方道伏見柳谷高槻線を新名神高速道路へのアクセス道路として整備するために、拡幅工事が行なわれる事となり、古墳群内の山側を新たに切り崩す屋根上の部分に関して、平成27年2月に確認調査を行ないました。

その際、遺構と遺物が発見され、大阪府教育委員会の指示により、調査区を拡張し、本調査として調査を行なう事となり、平成27年3月に実施いたしました。

その結果、古墳時代後期の古墳群として知られていた梶原古墳群であるにも関わらず、古墳時代初期の溝と土器が発見され、他にも、平安時代のものと思われる焼土坑なども発見されました。小さな調査区でしたが、貴重な成果を上げる事ができたと言えるでしょう。

最後に、調査にあたり、大阪府茨木土木事務所、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会などの関係諸機関ならびに、ご指導・ご助言を賜った多くの方々に感謝申し上げるとともに、今後とも当センターの調査事業に、より一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成27年7月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 田邊 征夫

例 言

1. 本書は大阪府高槻市梶原から萩庄ならびに萩之庄1丁目にかけて所在する梶原古墳群（調査名：梶原古墳群 14-2）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府茨木土木事務所が「主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路側道工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託（その2）」として、公益財団法人大阪府文化財センターと、平成27年3月2日に、委託契約を締結した。委託期間は平成27年3月2日から平成27年7月31日までとして、平成27年3月2日から平成27年3月13日まで現地調査を行なった。その後、平成27年3月16日から平成27年4月15日まで遺物整理を行ない、平成27年7月に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。
平成26年度
事務局次長 江浦洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査課長補佐 金光正裕（平成27年4月30日まで）、副主査 三宮昌弘
平成27年度
事務局次長 江浦洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、調査第二課長補佐 金光正裕、副主査 三宮昌弘、専門員 片山彰一 [写真室]
4. 本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影した。遺物写真撮影に関しては、写真室が担当した。
5. 現地調査の実施及び遺物整理にあたっては、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会などの関係諸機関、大阪府茨木土木事務所など関係各位をはじめ、多くの方々からご指導ならびにご協力を賜った。記して謝意を表したい。
6. 本書の執筆・編集は三宮昌弘が行なった。
7. 調査に関わる資料は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用される事を希望する。

凡 例

1. 本書で用いる標高は全て東京湾平均海面（T.P. 値）を使用している。単位はmで表記している。
2. 本書に掲載した全体図・遺構図などの座標は全て世界測地系に基づく平面直角座標系第VI系を使用している。単位は全てmで、表記は省略してある。
3. 方位は全て座標北で表示する。真北は座標北より東に $0^{\circ} 23' 26''$ 、磁北は西に $7^{\circ} 02'$ 振っている。
4. 発掘調査及び遺物整理については当センターの『遺跡調査基本マニュアル』に準拠した。
5. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所色彩監修を使用した。
6. 遺構番号・出土状況の土器番号は種類に関係なく通し番号で付け、現地調査時点から変更していない。
7. 挿図の縮尺は、基本、全体図が60分の1、遺構平面図・断面図が20分の1、調査区壁土層断面図が60分の1、遺物が4分の1である。
8. 遺物実測図に関しては、強い屈曲は実線、弱い屈曲は開け幅1mm以上の二つ開き破線で、調整境は、開け幅0.5mmで、異種調整境は一つ開き破線、同種調整境は二つ開き破線で示す。釉・煤などの範囲は点線で示す。推定ライン・断面の粘土接合痕なども点線で示す。
9. 写真図版の遺物写真は、縮尺は合わせていない。写真右下の番号はその遺物の図版番号である。
10. 参考文献は第4章「総括」の末尾に記した。

目 次

序 文
例 言
凡 例
目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 経緯と経過	1
第2節 調査の方法	2
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査成果	7
第1節 基本層序	7
第2節 遺構面の成果 第3面	11
第3節 出土遺物	15
第4章 総括	18

抄 録
奥 付

挿 図 目 次

図1	遺跡分布図	2
図2	調査区位置図	3
図3	確認調査トレンチ及び周辺等高線図	4
図4	本調査トレンチ及び周辺等高線図	5
図5	トレンチ断面図	10
図6	第3面平面図	12
図7	1溝土器1出土状況図	13
図8	2土坑平面図・断面図	14
図9	4土坑・3ピット・5ピット断面図	15
図10	出土遺物	16

写 真 図 版 目 次

1、確認調査遺構検出状況（北東から）	14、第2層出土 土師器高坏片
2、調査区第3面（南から）	14 [〃] 、同上
3、調査区第3面（北から）	15、1溝上層出土 土師器椀
4、1溝全景（東から）	16、1溝下層出土 土師器垂下口縁加飾壺片
5、1溝断面（東から）	16 [〃] 、同上部分
6、1溝土器1出土状況（南から）	17、1溝下層出土 土師器垂下口縁加飾壺片
7、2土坑炭層検出状況（北東から）	17 [〃] 、同上部分
8、2土坑断面（南西から）	18、1溝下層出土 土師器壺頸部片
9、2土坑完掘状況（南東から）	19、1溝下層出土 土師器壺頸部片
10、4土坑（南西から）	20、1溝下層出土 土師器壺肩部片
11、表土出土 磁器染付小皿片	21、1溝土器1 土師器垂下口縁加飾壺片
12、第2層出土 須恵器坏片	21 [〃] 、同上頸部
13、第2層出土 土師器高台坏片	21 ^{〃〃} 、同上肩部

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 経緯と経過

本報告書では、梶原古墳群（図1）において平成27年3月2日から平成27年7月31日まで行なった「主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路側道工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託（その2）」の調査成果を報告する。

大阪府茨木土木事務所により、主要地方道伏見柳谷高槻線を新名神高速道路へのアクセス道路（高槻東道路）として整備するため、拡幅工事が計画された。この道路は高槻市東部で名神高速道路の北側に沿って走る側道となっており、拡幅のためには北側、北摂山地から伸びる尾根を切っている法面をさらに切り直さねばならない。

そこには、高槻市梶原から萩之庄にかけて広がる梶原古墳群が遺跡範囲としてかかり、その西側も高槻市安満磐手町から山手町にかけて広がる磐手杜古墳群に隣接している（図1）。

そのため、大阪府茨木土木事務所と大阪府教育委員会の協議の結果、試掘調査と確認調査を公益財団法人大阪府文化財センター（以下、「当センター」と略す）に委託する事となり、平成26年12月5日に大阪府茨木土木事務所と当センターとの間で委託契約が交わされ、「主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路側道工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託」として、平成27年1月5日から平成27年3月20日の委託期間で調査を行なう事となった。

調査は西側で「磐手杜古墳群隣接地14-1-1-2区」として二つの調査区を設け試掘調査を行ない、東側では梶原古墳群の範囲内で削られる尾根上に「梶原古墳群14-1-1区」として一つの調査区を設け確認調査を行なった（図2・3）。

平成27年2月16日から調査に入った「梶原古墳群14-1-1区」で、土器片の出土が見られ、焼土坑・尾根を横切る溝などの遺構が確認されたため、2月19日に大阪府教育委員会の立会を受け、調査区を拡張し、本調査とするよう指示を受けた。

そのため、大阪府茨木土木事務所と当センターは新たに「主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路側道工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託（その2）」として平成27年3月2日に委託契約を交わした。委託契約期間は平成27年3月2日から平成27年7月31日である。

調査名としては「梶原古墳群14-2」となり、調査区は一か所のみなので「梶原古墳群14-2-1区」となる。調査内容は「梶原古墳群14-1-1区」時点の成果も含んで報告する。

調査区を、東・西・南側は尾根が急斜面を成すところまで、北側は工事の及ぶ範囲まで拡張し調査を行なった（図4）。調査面積は49㎡である。平成27年3月10日に大阪府教育委員会の立会を受け、平成27年3月11日にボール使用の写真測量を行なった。

その後、立会での大阪府教育委員会の指示により、遺構切り合い部分と、風化岩盤以外の層が堆積していた部分を掘削し、新たな遺構・遺物がない事を確認し、平成27年3月13日に現地での調査を終了した。

平成27年3月16日から平成27年4月15日に、報告書作成へ向けての整理作業・原稿作成を行ない、平成27年7月31日の本報告書刊行をもって作業を完了した。

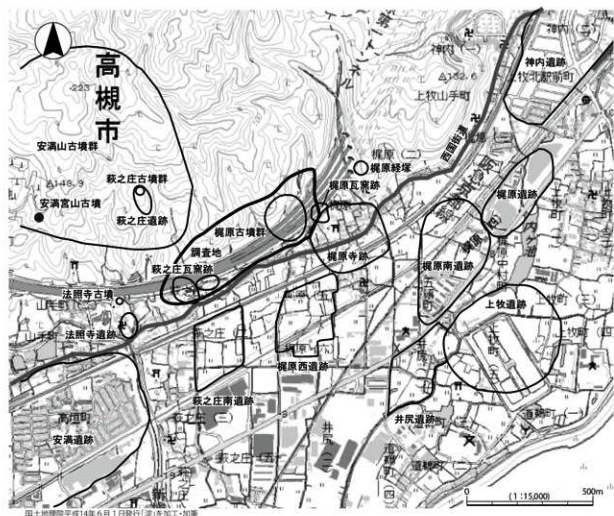


図1 遺跡分布図

第2節 調査の方法

調査は表土を人力掘削で除去した後、第1面で攪乱・遺構の有無を確認し、第2面で第2層の広がりを確認した後、風化岩盤層である第3層上面の第3面で遺構を検出、調査し、完掘した状態で調査を終了した。

人力掘削はスコップ・鋤鎌・手ガリなどを用いて慎重に行ない、遺構の検出および遺物の収集に努めた。多くあった木・竹の根・株は鶴嘴・手バチ・鋸・根切り鉄などで適時除去したが、除去すると、調査区壁面・遺構面・遺構が壊される恐れのあるものは残した。

表土以外の堆積層は上から順に番号を振り、無遺物の第1層は二つの層に分かれていたので第1-1層・第1-2層と枝番号をつけた。遺構が存在し、平面的調査を行なったのは、基盤となる風化岩盤層である第3層上面のみで、第3面とした。その面でボールによる写真測量を行なった。

確認調査時の調査区西壁となっていたラインを幅30cmで土層観察用のセクションとして残し、調査区断面図を作成した後、除去した。それが1溝の断面図も兼ねる。その他、遺構の断面図・平面図、遺物の出土状況図を適宜作成した。調査区周辺の等高線図を高さ50cm間隔で作成し、第3面の遺構

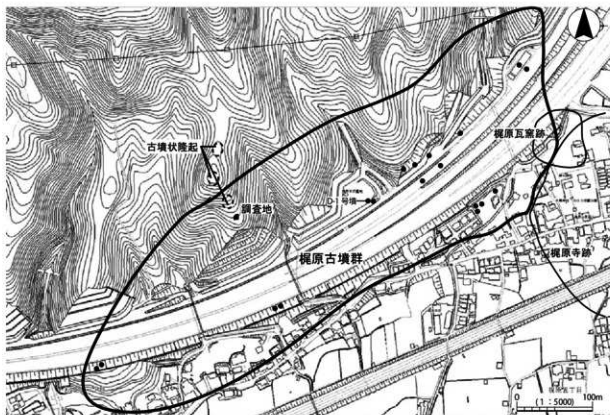


図2 調査区位置図（ドットは既往の調査の古墳）

検出時の平面図を平板測量で作成した。各図面の位置情報は確認調査時に設置した4級基準点H26-1から測り、国土座標は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）、標高は全て東京湾平均海面（T.P.値）を使用している。

調査区・遺構断面などの土色・土質の記載における土色は「小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所色彩監修」を使用した。

記録用の写真撮影は、6×7モノクロフィルム・リバーサルフィルム、35mmモノクロフィルム・リバーサルフィルムを用いて行ない、台帳作成およびメモ写真撮影用としてデジタルカメラも使用している。撮影後のフィルムは現像し、当センター所定のアルバムに収納した。

出土遺物は、各層・各遺構単位で取り上げた。遺物には、トレンチ名・層位・遺構名・出土年月日・登録番号などを記したラベルを添付し、順次洗浄、注記、接合を行なった。実測可能な状態にまで復元できた遺物は実測し、観察所見を図面に注記した。必要なものは遺物撮影を行なった。

平面図・断面図・遺構図・遺物図は編集・トレースを行ない、報告書掲載図面とし、現場写真・遺物写真は編集し写真図版にまとめ、執筆を経て報告書とした。

写真、出土遺物、図面は台帳を作成し、登録作業を行なった。遺物はラベルを添付したコンテナに収納し、図面も調査名を明記したケースに収納した。

日々の作業の内容は、週報を作成し、記録している。

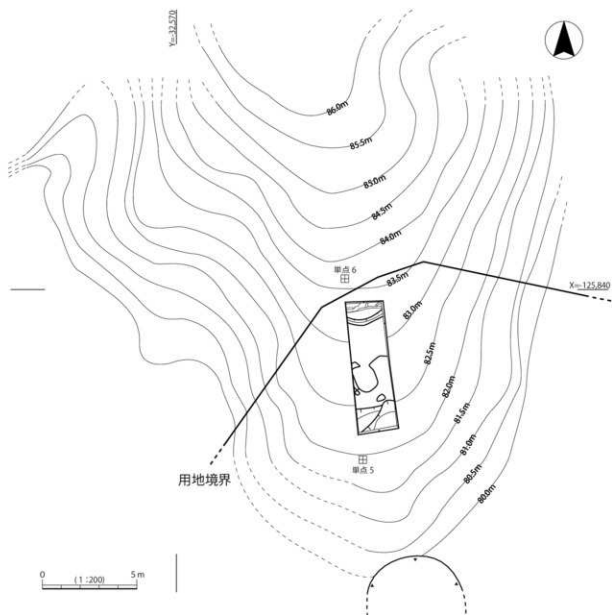


図3 確認調査トレンチ及び周辺等高線図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

梶原古墳群は高槻市梶原から萩庄ならびに萩之庄1丁目にかけての山腹に所在する(図1)。

大阪府北東部の高槻市は、北側を丹波層群からなる標高約150～700mの北摂山地が占め、南側に平野が広がる。平野部では山地から流下する芥川、桧尾川などの中小河川が、市域の南東を画する淀川に合流する。高槻市・茨木市・摂津市の平野部と吹田市南東部の平野部を合わせた範囲を「三島平野」と呼ぶ。

高槻市域西部では北摂山地から、大阪層群を基盤とする高槻丘陵・南平台丘陵・奈佐原丘陵が派生し、奈佐原丘陵の南端からは、古来「藍野」と呼ばれた、低位段丘に位置づけられる富田台地が広がる。

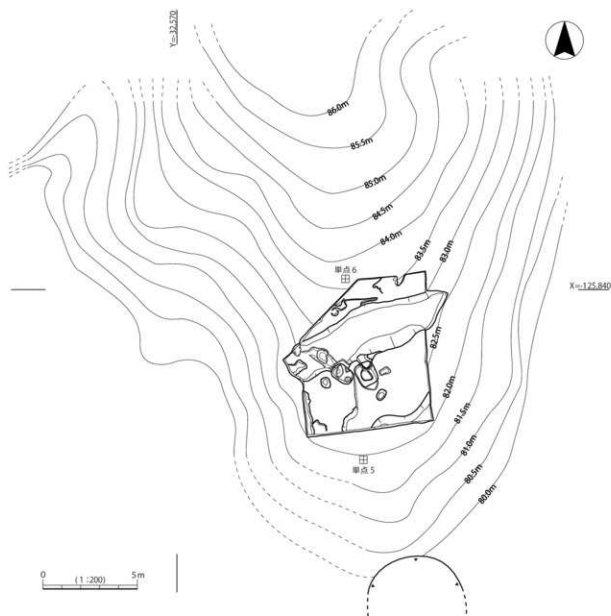


図4 本調査トレンチ及び周辺等高線図

市域東部では、松尾川以東の平野部は北摂山地と淀川にはさまれ、幅約1kmの狭隘なものとなる。山地際には、わずかに残存する大阪層群と小河川の扇状地が交錯する傾斜地帯が存在し、西国街道が通る。そこから南東は沖積平野で、小河川が屈曲する中に小規模な微高地が点在する。淀川に近い部分は淀川旧流路も含め、後背湿地的状況で、淀川の河川敷には「鶴殿の草原」として有名な、広大な草原が広がる。

梶原古墳群は、高槻市域東部で、北摂山地のポンポン山山塊が平野に向かい派生させる尾根上に立地する。大きく見れば山地南東斜面となるが、幾つも伸びる枝尾根はほぼ南北方向に近いものが多く、その枝尾根上に古墳が立地している。古墳群域の標高は30～100mほどである(図2)。

古墳群からは東は男山丘陵、南東には生駒山地も見渡せ、南西方向三島平野への見通しもきく。

第2節 歴史的環境

今から6400年前頃、縄文時代前期の縄文海進最盛期には、梶原古墳群から見下ろす付近が、河内湾に注ぐ淀川河口であったと考えられている。

弥生時代には、松尾川右岸の安満遺跡が、前期から後期まで存続する拠点集落として知られている。そこから東の、狭隘で低湿な淀川右岸の平野部に集落が進出するのは弥生時代中期頃である。梶原古墳群南東直下の梶原西遺跡で中期の方形周溝墓群、梶原南遺跡では中期の土坑、後期の竪穴住居跡や溝、上牧遺跡で中期の竪穴住居跡や後期の土器が検出され、井尻遺跡でも中期の土器が確認されている。

また、梶原古墳群南側の萩之庄南遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓の他、今回調査の1溝と同時期の、弥生時代末期から古墳時代初頭、庄内式期の竪穴住居跡や大溝などが検出されている。

続く古墳時代にも平野部で、梶原寺跡・梶原南遺跡・上牧遺跡・井尻遺跡などで古墳時代初頭から前期の遺構・遺物が確認されているが、古墳時代中期のものは、井尻遺跡で中期中葉の土坑が確認されている程度で、現状では密度が低くなる。

その平野部の北東側の、梶原古墳群の立地する山塊には多くの古墳が見られる。

古墳時代前期の古墳は、萩之庄古墳群の前方後円墳である萩之庄1・2号墳と、その南西約400mの尾根上に、方墳ながら、「青龍三年(235年)」銘のある方格規矩四神鏡と最古型式の三角縁神獸鏡が出土した、安満宮山古墳がある。各々孤立した立地だが、北摂山地が最も南へ張り出す高い尾根の上にある。

この地域では中期の古墳は確認されておらず、平野部の遺跡と似た傾向である。古墳時代中期には、三島平野西部で、宮内庁が継体天皇陵とする太田茶白山古墳が出現している。「藍野」である富田台地上である。奈佐原丘陵上の新池遺跡では、埴輪窯ができ、三島平野西部の勢力が突出するような状況がある。

古墳時代後期になると、梶原古墳群周辺に群集墳が急増する。6世紀後半頃のものが多く、中心は安満山古墳群で40数基の古墳が標高100～200mの比較的高い尾根上に分布する。

そこから南西に伸びる尾根の先端付近に磐手杜古墳群がある。松尾川が三島平野に出る所に臨み、対岸にも紅茸山古墳群・奥坂古墳群など小規模な古墳群が丘陵上に立地する。

安満山古墳群の南東下部に位置するのが梶原古墳群である。名神高速道路拡幅工事に伴い平成3年から平成5年にかけて行なわれた調査で18基の古墳が検出された(図2)。主体部のみ検出され墳丘が不明なものも多いが、3基の方墳も確認されている。主体部には横穴式石室の他、竪穴の小型石室もある。

その中で径約25mと最大の円墳で、片袖式の横穴式石室に家形石棺が納められていたD-1号墳からは、変型剣菱形杏葉をはじめとする馬具や、珠文鏡・金環・ガラス小玉など豪華で豊富な遺物が出土している。

今回の調査区は、上述の調査で尾根ごとにつけられた名称では「F尾根」に位置するが、それらの調査区が標高30～40mほどの高さにあるのに対し、標高80m強とかなり高い。しかし調査区から北へ尾根を上がった103.2mのピークと、その南側、北東側に、計3基の古墳状隆起が認められ、ピークの1基の中心には凹部が認められた。梶原古墳群内では、未確認の古墳も相当数存在する可能性がある。

上述の調査では、竪穴住居跡4基、掘立柱建物7棟の他、土壇5基、土器棺墓1基、火葬墓1基も検出されている。竪穴住居と土壇・土器棺墓は7世紀、飛鳥時代のもものと判明しており、9世紀中頃の火

葬墓以外はその時代の遺構の可能性が強い。古墳時代以降も連続して墓域であり、かつ居住域も成立した事となる。

その背景となるのは、梶原古墳群の東に隣接する梶原寺跡と梶原瓦窯跡であろう。梶原瓦窯では7世紀中頃の瓦も見られ、梶原寺の創建もその頃と考えられている。高槻市域最古の寺院であり、おそらく梶原古墳群の被葬者集団の後裔の氏寺として創建されたのであろう。梶原寺は「正倉院文書」によれば、東大寺の創建時に瓦を供給している。梶原瓦窯では飛鳥寺と同文の瓦も確認されている。

奈良時代には梶原南遺跡で多数の建物群とともに「新屋首乙賣（にいやのおびとおとめ）」と記された木札が発見されている。上牧遺跡にも同時代の建物などがある。

条里型地割は梶原西遺跡以西にその痕跡を留めるが、そこから東では認められない。9世紀末頃には淀川沿いに公私の牧が散在していたらしく、耕地開発がしにくい状況があったのであろう。

平安時代後期では、井尻遺跡で11世紀後半、出現期の瓦器が黒色土器と多量に共存する状況が見られ、白磁や青磁の輸入磁器も見られる。その東隣の上牧遺跡は中世瓦器編年の基準資料が出土した事で有名な遺跡である。中世には淀川右岸の不安定な微高地に進出する集落が増加する。

16世紀には高山右近が高槻に居城を構え、北摂にキリスト教が普及する。高槻市街地や、茨木市千提寺西遺跡などでキリシタン墓が発見されている。

梶原古墳群が立地する山塊には「太閤道」が残されている。羽柴秀吉が山崎の合戦に向け通った道である。その道沿いの山中には延暦9年(790年)創建とされる金龍寺旧境内跡がある。桜の名所として、能因法師・西行・松尾芭蕉も訪れ、「摂津名所図会」にも取り上げられていたが、今は廃寺となっている。名神高速道路をはじめ、国道171号、東海道新幹線、JR東海道線、阪急京都線などが通るこの地は、今も交通の要衝であり、次第に住宅や工場も増えつつあるが、西国街道沿いには、藤原氏と関連する春日神社系統の神社、中世民衆と結びついた真宗や日蓮宗の寺院などが残り、歴史的景観を留めている。

第3章 調査成果

第1節 基本層序

概観

調査区は、先述したとおり、平成3～5年の調査で「F尾根」とされた尾根上にあり(図2)、北西側のT.P.+103.2mのピークから南東へ伸びた尾根が南西へ方向を転じる地点である。ここでは稜線がほぼ南北方向となり、やや平坦になる現地形であった(図3・4)。標高はT.P.+82～83.5mの中におさまる。

東西の斜面は急峻であり、稜線の傾斜も調査区の南北は急となる。稜線幅6mほどの痩せ尾根である。

調査区の上層断面は、確認調査時の調査区の西壁となっていたラインが、ほぼ稜線に沿っていたため(図3)、そこにセクションを残し、実測した(図5)。東西方向の断面図は、調査区北壁は表上下に直接風化岩盤層である第3層があり、南壁は無遺物の第1～2層がかかるのみであったので、実測しなかった。

堆積層は、1溝部分を除き、平均して厚さ30cm弱である。風化礫を含み、稜線で高い北側から崩落

してきたものであろう。その下は岩盤が風化して軟らかくなった層である。表土も5cm程度と薄く、細片化した植物遺体が細い根と絡みついた状態であった。1溝内の堆積も、上下層の包含遺物から見れば非常に埋没が遅く、それが稜線の方向転換部分である事と伴って、調査地点の現地形をやや平坦なものとしたと思われる。

なお、表土からは高台付きの染付小皿片と裏口縁と思われる無釉陶器小片が各1片出土している。

以下、各層の状況を述べる。遺構の形成順にも関わるので、1溝埋土に関してもここで述べる。

各層の状況

第1-1層 2.5Y6/4～5/4 にぶい黄～黄褐色、砂質土、シルト～細砂主体、粗砂～小礫あり、木の根多し、やや有機分あり。有機分を含み少し暗色なので、若干植生が回復した状態で徐々に堆積した層であろう。1溝が完全に埋没した上から、第1-2層上面が平坦な部分にかけて堆積している。上半は植物根の攪乱が激しい。包含遺物は皆無である。

第1-2層 5Y6/2～2.5Y6/3 灰オリーブ～にぶい黄色、砂質土、シルト～細砂主体、小～中礫の風化礫・粗砂あり。風化岩盤が崩落して堆積した層と思われる。南側で第1-1層が上にない部分は上面がやや下がり、層上部が若干流失していると思われるが、第1-1層が上を覆う部分は上面がかなり平坦である。その事と、断面でも2土坑の上部には堆積していないように、今回検出した第3面の遺構の上を覆わない範囲にしか堆積していないので、人為的に風化岩盤を掘削した土で平坦面を造成した層である可能性を完全には否定できない。しかし、植生のある部分を掘削した土なら土壌化したブロック土が含まれるはずである事と、包含遺物が皆無である事、わざわざ平坦面を造成したとしてもその上面に遺構が存在しない事などから、その可能性は低いとは言える。

第2層 10YR6/4 にぶい黄橙色、粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～小礫若干あり、炭化物若干あり、土器小片あり、中礫わずかにあり。北端の風化礫層（第3層）が高い部分には広がらず、1溝の上から2・4土坑の一部の上までの範囲に広がる。やや有機分を含んだような層なので、2土坑などの形成で人の手が入った後、次第に植生が回復する中で堆積した層であろう。

遺構埋土以外では唯一の遺物包含層で、1溝埋土と同じ土師器壺片から、平安時代頃と思われる土師器椀環類の破片を含むが全て小片である。1溝下層の土師器壺頸部と同一個体の破片が4片あったが、層下面も南に直線的に傾斜し、1溝埋土を侵食した痕跡はないので、包含遺物は1溝埋土から再堆積したものは多くなく、北側高所から流入したものが大部分と思われる。最大長2cm以上の破片で、土師器片46片、その内、薄手の物は10片で、椀環類口縁らしきもの5片、断面三角の高台が付く破片1片がある。厚手の物は36片、環部が椀型の高環8片、壺頸部4片がある。須恵器は平らな1片のみで、回転ヘラケズリ後ナデの面に微細な粘土塊が付着する、環底部片である。他に若干含まれる炭化物には、硬く炭化し、明らかに生産物としての炭の細片と思われるものがある。

1溝上層 10YR6/4～7.5YR6/3 にぶい黄橙～にぶい褐色、粘質土、シルト主体、粗砂～小礫あり、中礫若干あり、わずかに炭化物あり。1溝下層が溝を埋没しきらず、若干侵食も受けた状況の地形に堆積した層である。上面は南に傾斜しながらも直線的なので、この層が1溝を完全に埋没させたと言ってよい。

この層上面で、溝南側肩の一部が崩れ、侵食痕状に2土坑の上に乗る部分があり、2土坑埋土上面の凹部にも堆積していた。層を完全に除去した時点で2土坑の輪郭が見えたので、2土坑は1溝上層堆積以前に形成され、埋没していた事が判明した。

1 溝内で2土坑に近い部分(図5の5点線より左)には2土坑由来と思われる「5YR4/4にぶい赤褐色、シルト」の焼土塊と炭化物が特に多い。そしてその部分上面に2土坑西側の4土坑が切り込んでおり、2土坑埋没、1溝上層堆積、4土坑掘削の順番で遺構形成があった事が判明した。

1 溝上層の包含遺物は土師器のみで、薄手のもの24片、椀坏類の口縁らしきものが13片で、その内、口縁端部外面に強いヨコユビナデが入るものが11片ある。厚手のもの41片は全て壺片で、垂下口縁で内外に波状文が入り、口縁下辺に径7mmほどの円形附文が並ぶ口縁片6、波状文のある胴部1片がある。他の胴部片には外面にミガキが残るものが多い。遺物は集中する事なく、1溝内の広い範囲から出土している。土師器垂下口縁加飾壺と分かる破片は、全て1溝土器1をはじめ、1溝下層出土のものと同一体である事が確認された。おそらく他の壺片も同じ状況と推測されるが、1溝下層を侵食して遺物が入ったのか、1溝に流入してくる遺物の元の位置が同じであったのかは即断できない。

なお、1溝内の調査区西壁際からも土器片が出土したため、1溝埋土を掘り残さずに遺物を回収するため、1溝の範囲のみ東西に若干拡張したが、1溝上層も当初の東西壁より20cmも伸びない位置で途切れ、1溝下層は当初の調査区内のみ堆積していた事が判明した。

1 溝下層 2.5Y5/4 黄褐色、砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、風化礫の小礫あり。今回の調査では暗色と言える層である。1溝内の北肩部付近にはさらにこの上に、「2.5Y6/4にぶい黄色、粘質土、シルト主体、粗砂あり、1cm前後の風化礫多し。(図5の7)」が堆積している。風化礫の多さから崩落土層であろう。それも層の質と包含遺物から1溝下層に含めた。2土坑のある部分には堆積しておらず、1溝下層と2土坑の層位関係は直接には把握できない。

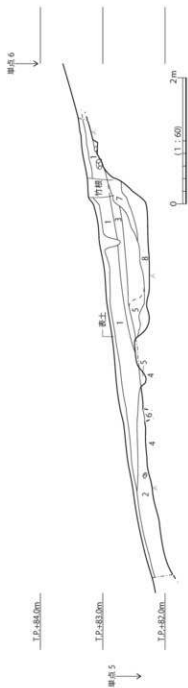
包含遺物は壺と思われる厚手の土師器のみ48片で、1溝上層の垂下口縁壺口縁部片と文様構成が同じ口縁部片が4片、頸部片7片中、頸部下端に細い突帯と径3mm弱の竹管文の巡るもの5片(頸部完周する1溝土器1の2片含む)、頸部下端に細い突帯のみ1片があり、少なくとも3個体の破片が混在している事が分かる。波状文のある胴部1片、刺突文のある胴部1片もある。薄手の土師器椀坏類の破片が皆無な事から、この層が1溝掘削から遠くない時期としての庄内式期の堆積層、1溝上層が薄手の椀坏類のある平安時代頃の堆積で、2土坑形成の時期を示すと考えられる。他に若干の炭片が出土している。

土器の出土状況は、集中する部分はないが、唯一出土状況を記録できた1溝土器1(図7)を南限として、ほぼ溝の北半に偏る傾向がある。また、ほとんどが溝底部には付かず、層内で若干浮いた状態で出土した。それらの事から土器は調査区外北側から破片の状態で流入したものと考えられる。壺胴部の破片でも、底部及びその周辺らしき破片は皆無であるので、調査区外北側高所に据えられた形の複数の壺が割れ、その上半部の破片が流入した可能性が高い。

第3層 2.5Y7/2～5Y7/2 灰黄～灰白色、粘質土、シルト主体、粗砂～小礫あり。岩盤がそのまま風化した風化礫層である。表面は節理に沿って割れた礫の間に風化した砂粒が詰まる。鉄分の付着の少ない部分は、やや青味があったような印象を受ける。調査区全体に見られ基盤を成す層だが、調査区北西隅付近では、この層の上位に「2.5Y7/3 浅黄色、粘質土、シルト～細砂主体、粗砂あり。」の層があり、1溝に切られていた。それも無遺物層で、炭化物の混じりもなく、古い堆積層と思われる。

小結

調査区の東西外側の急斜面では、1溝埋土を掘り残さないために拡張した部分で見ると、表土と第3層しかない状況であった。北側も、調査区北壁で、第3層の上に若干移動したような風化礫が乗り、そ



- 1、2.536/4～5/4 には、いはい、灰～腐敗、砂質土、シルト～細砂主体、粗砂～小礫あり、木の根多し、やや有機分あり、1～1層、
- 2、536/2～2.536/3 灰ネリ層、砂質土、シルト～細砂主体、小～中程度の風化礫、粗砂あり、ブロック状構造、1～2層、湖底上?
- 3、1078/4 には、いはい、腐敗、粘質土、シルト～粘土主体、粗砂～小礫若干あり、風化物質若干あり、上部片あり、中礫わずかにあり、2層、⑤と同じ内部の遺物小片遺存
- 4、2.537/2～537/2 灰層～灰白、粘質土、シルト主体、粗砂～小礫あり、風化礫、3層
- 5、1078/4～7.538/2 には、いはい、腐敗、粘質土、シルト主体、粗砂～小礫あり、中礫若干あり、わずかに風化物質あり、1層、2土粒置土、1層土層(湖底より互は、538/4 には、いはい、中間、シルト湖上層、風化物質多し)砂土～平仮の遺物遺存
- 6、3層(4)と1078/2 中間、シルト(腐敗?)のブロック(木の根の周辺)
- 7、2.536/4 には、いはい、腐敗、粘質土、シルト主体、粗砂あり、1m前後の536/2 灰ネリ層の風化礫多し、湖底上、1層下層
- 8、2.535/4 灰層、砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり、1～0.5cmの風化礫層行のものと同じあり、1層下層、圧内式土層のみ遺存

図5 トレンチ断面図

の上に直接表土があるのみである。南壁では第1-2層が続くが、無遺物で崩落層と考えられるものである。調査区に遺物包含層である第2層が堆積したのは、1溝が掘削された事による地形改変が影響していると言える。

しかし、北側で調査区外のそう遠くない位置に、遺構や遺物群が存在する可能性が高い事は、第2層と1溝埋土の遺物包含の状況からも推測できる。さらに1溝下層堆積前に形成された遺物群は土師器垂下口縁加飾壺が複数個体存在するようなものであったと推測できる。また、1溝上層堆積前の遺物群は土師器供膳器で構成されるものであった可能性が高い。

第2層・1溝上下層と、2・4土坑の切り合いから、調査区の遺構の形成順序が判明したことも大きな成果である。1溝掘削、1溝下層堆積、2土坑掘削から埋没、1溝上層堆積、4土坑掘削から埋没、第2層堆積、の順に復元できる。また、埋土の共通性から、3ピットは2土坑と、5ピットは4土坑とほぼ同時期の遺構と考えられる。

興味深いのは、1溝下層が1溝掘削後、1溝上層は2土坑掘削後、第2層は4土坑掘削後と、遺構の形成を契機とするように層の堆積が見られ、特に1溝下層と上層では、古墳時代初頭頃と平安時代頃というように、かなり期間が空く事である。これは人の手が入る都度に植生が破壊され、土層の流出・堆積が進行し、植生の回復と共に土壌が固定化され堆積・侵食が減少するという過程を示す可能性が高いと思われる。であるならば、無遺物の第1-1・2層の堆積も、調査区付近が肥料としての腐葉土の採取、薪炭木の伐採、竹林の造成など、里山としての利用度が高くなった結果、崩落が引き起こされ、堆積したものかも知れない。

第2節 遺構面の成果 第3面

概観 (図6・図版2・3)

今回の調査で遺構の形成が見られたのは風化岩盤層である第3層上面である第3面のみであった。この面の地形は稜線のラインが調査区北壁のほぼ中央から伸び、1溝をまたいでからやや南西に曲がり抜けていく。東西は調査区際に傾斜変換点があり、その東西は急斜面になると思われる。南側は徐々に傾斜が強まるが、南東側が特に落ち方が強い。土坑・ピットは1溝南側の比較的平坦な位置にあるが、最も高い部分よりやや西側に集中している。

なお、断面図を作成したライン付近は、確認調査の段階で強めに掘削したので、やや掘り過ぎの部分がある。また、木・竹の根・株の除去のために掘り過ぎた部分や、根自体による攪乱なども多い。

各遺構の成果

1溝 (図5・6・図版4・5) 埋土に関しては「第1節 基本層序」の部分で先述した。かなり直線的ではあるが、東西方向で西側がやや南へ曲がっていく。平均して幅2.6mほどの断面逆台形の溝で、北側肩部からの深さは約0.7m、南側肩部からの深さは約0.2mとなる。底部のレベルは東西端で落ちるが全体的には西側へ下がる傾向がある。

溝の壁は北側の傾斜が強く、垂直に近い部分もあるのに対し、南側は緩やかである。南側肩部のほぼ中央付近が南の2土坑上に侵食痕状に突出している事は基本層序の部分でも先述したが、1溝上層がそこから2土坑中央の凹部まで覆い、その時点でも1溝と2土坑の切り合いは見えなかった。1溝上層を除去した時点で第3層が露出し、1溝下層はその部分にまで及んでおらず、2土坑の全体形が見えるよ

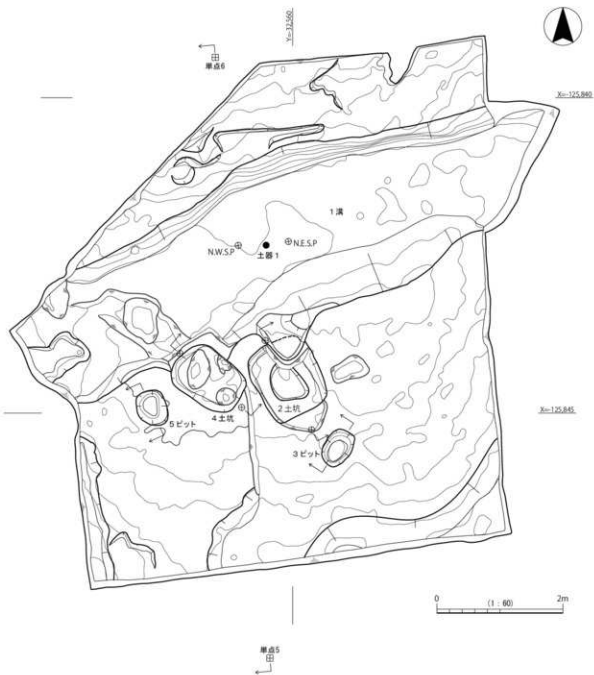


図6 第3面平面図

うになった。1溝南側肩部の突出部は2土坑に向けて徐々に浅くなっていく形で、1溝肩部が侵食された痕跡と判断した。

この部分でのみ1溝肩部が侵食されたのには次の理由が考えられる。調査区は調査中に一晩雨が降ってもほとんど雨水が溜まらないほど水はけの良い環境であった。しかし、2土坑は内面が火を受けて赤変している土坑で、埋土上面も凹面を成していた。土坑埋没後、そこだけ水はけが悪い状態になり、さらにその北隣に、下層が堆積してもまだ溝状の凹地形を保つ1溝があったため、2土坑から1溝への水の流れて侵食が進んだのであろう。

溝のほぼ中央の底面近くから土器1が出土した(図7・図版6)。土師器垂下口縁加飾壺の頸部から肩部にかけての破片で頸部は完周し、口縁側が上を向いた正置の状態であった。溝底部からは5cmほ

ど浮く。1溝下層からは土器垂下口縁加飾壺の破片のみ出土しているが、この土器1がその中でほぼ南端に近い出土位置で、ほとんどが溝北半からの出土である事と、ほとんどの破片が溝底部から浮いた状態であった事は基本層序でも先述したとおりである。

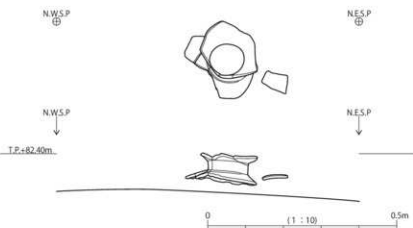


図7 1溝土器1出土状況図

溝の性格としては、平面形が円弧を成さないで、円墳の周溝とは考えにくい、また、溝底面が幅広く、比較的平坦であるので、高地性集落の環濠や山城の堀とも考えにくい。1溝下層出土遺物が庄内式期の土器器垂下口縁加飾壺片のみである事、それが調査区外北側高所に複数データえられていたものが破片となって流入した可能性が高い状況などを考えると、この溝は山地の尾根を2本の溝で切断して方形の区画を作り、その中に埋葬を行なう方形台状墓の溝の可能性が高いと考える。掘削時期は庄内式期で、埋葬主体は調査区外北側高所にあり、その付近に土器器垂下口縁加飾壺が供献されていたのであろう。ただし、同類の土器器垂下口縁加飾壺片は1溝上層・第2層にも含まれるが、第2層には土器器高坏片もあり、その形態は坏部が椀型のもので、遡っても古墳時代前期後半頃と新しいものである事は留意を要する。

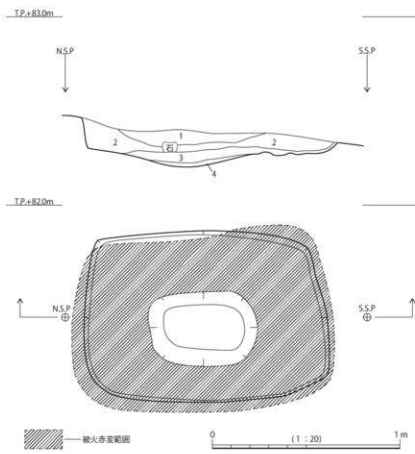
溝は下層が堆積した後、ほとんど埋没が進行せず、溝の痕跡を残した状態の時期が続き、下層上面も若干侵食を受けたような形態が認められた。完全に埋没するのは2土坑が形成された後、上層の堆積による。2土坑埋土が侵食されて流入した焼土・炭化物が、溝埋上層の2土坑に近い部分にのみ多い事は基本層序の部分で先述したとおりである。

2土坑(図8・図版7～9) 1溝南側肩部沿いのほぼ中央にあった土坑で、1溝上層堆積過程で、その肩部に発達した侵食痕に埋土を切られているのは先述した。北西から南東方向の長さ1.28m、幅0.91mの隅丸方形の平面形を持ち、深さは0.28mほど、壁は南東短辺が木の根の攪乱でやや崩れるが、他はほぼ垂直に立つ。底部中央に長軸方向を土坑平面形と合わせた、長軸0.58m、短軸0.39mの凹部があり、平らな底部から6cmほど下がる。その中は下層に砂質土が薄く残る(図8断面図の4)他は、1～0.3cmほどの炭が敷き詰めように入っていた(図8断面図の3)。

土坑壁面と底面は強く被火変色し5YR5/4にぶい赤褐色を呈する。ただし、北東長辺の北西半と底部中央の凹部は赤変していない。土坑肩部で見ると、赤変の厚さは5cm前後に及ぶ。

土坑埋土も全体に熱を受けたような砂質土で(図8断面図の2)、細かい焼土塊と炭片を含む。埋土上面も凹部を成し、中央部から北側隅にかけて、第2層(図8断面図の1)と1溝上層が堆積していた。炭片以外の遺物は皆無であり、骨粉らしきものも確認できなかった。

類例を考えれば、古代から近世の墓域に存在する、火葬を行なった施設と考えられている焼土坑に似たものがある。梶原古墳群の過去の調査で、9世紀代の火葬墓が確認されている事と、第2層・1溝上層から出土する土器器椀坏類の破片から考えれば、平安時代頃の墓域に伴う焼土坑である蓋然性が高い。しかし、調査地点周辺は墓域としてさほど広い面積を確保できる地形ではない。あったとしても数基の



1. 2.5Y6/3に近い黄 粘質土 シルト主体 粗砂あり 2層
2. 5YR5/3～10YR6/3に近い赤褐色に近い黄褐色 粘質土 細砂～シルト主体 中砂～粗砂若干あり 左(北)西側ほど厚味強く、5mm前後の5YR5/4に近い赤褐色シルト系の焼土塊・炭化物あり
3. 炭層 3～10mmの粒状の炭
4. 5Y5/2Rオリーブ 粘質土 細砂主体 中砂～粗砂若干あり 掘削土の残り?

図8 2土坑平面図・断面図

使用により発生した焼土や炭片を廃棄するものとしては小規模すぎると思われる。炭片以外、遺物は皆無である。

4 土坑 (図9・図版10) 2土坑の西側にほぼ隣接する、やや不整な隅丸長方形の土坑である。長軸方向は北西から南東であるが、2土坑の方向性よりさらに西に傾く。長さ1.14m、幅0.83m、深さ0.22mほどで、2土坑埋土由来の焼土塊・炭片を含んでいる1溝上層の一部を、北東隅が切り込んでいる。底部は平坦だが、埋土から底部にかけて木の根の攪乱が激しい。埋土には炭化物もなく、無遺物で、掘削後すぐに埋められたような印象を受ける。切り合いから、確実に2土坑とは時期の違う、より新しい遺構であると分かる。性格は不明である。

5 ピット (図9) 4土坑の西0.4mほどに位置する。長軸0.58m、短軸0.49m、深さ0.18mほどのピットである。埋土は第3層よりやや暗色で、炭化物・遺物が皆無な点が4土坑と似るので、同時期の遺構と推測する。性格は不明である。

小結

今回の調査では、遺構面1面、遺構としては溝1条・土坑2基・ピット2基のみの検出であり、遺物が出土した遺構は溝のみであった。

しかし、溝と土坑の切り合いが層位的に明確になり、埋土の共通性から2基のピットも2基の土坑それぞれと同時期と推測できたため、遺構の変遷はかなり明確に把握できる状況であったと言える。

火葬墓で形成されるような小規模な墓域であろう。現在では調査区周囲にその痕跡と思われるものは見当たらない。

3 ピット (図9) 2土坑から南東に約0.5mの距離にあり、長軸を北東から南西に向けるピットである。長軸方向は2土坑と直角を成すわけではない。長軸0.58m、短軸0.44mほどの楕円形で、深さ0.34mほど。埋土に焼土塊と炭片を多く含むため、2土坑と同時期の遺構と思われる。炭片は底部に近いほど多く、一つの炭片も大きくなる傾向がある。そのため、2土坑埋土から自然に埋土が流れ込んだとは考えにくく、2土坑と関連した施設と思われるが、2土坑

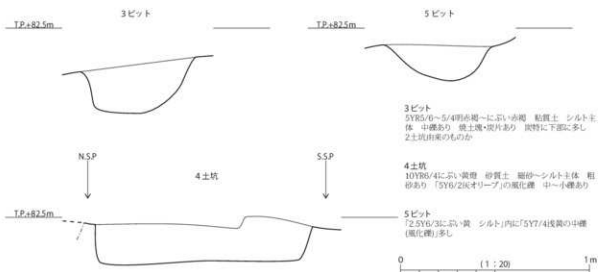


図9 4土坑・3ピット・5ピット断面図

1溝から古墳時代初頭、庄内式期の方形台状墓が存在する可能性が考えられるようになったのは、梶原古墳群の中で初の成果である。

2土坑を火葬施設と考えられるならば、平成3～5年の調査で検出された9世紀の火葬墓と関連付けて考える必要はあるものの、立地した尾根が異なり、標高も30m以上異なるもので、火葬墓群が古墳群内に広範囲に広がっていたのか、散在するような状況だったのかは未だ不明と言える。

調査区域はその後、時期は不明だが、4土坑・5ピットが形成される時があり、現代の土地利用を含め、計4回、人の手が入った時期があったと言える。調査区より北側に認められる古墳状隆起が、古墳時代後期の古墳であれば、もう一つの時期も設定できる可能性があると言える。

第3節 出土遺物

概観

遺物の出土が見られたのは表土、第2層、1溝上層、1溝下層のみである。ここではそれらの接合状況についてまず述べておく。

椀坏類と思われる薄手の土師器片は第2層と1溝上層から出土したが、復元できたのは、1溝上層出土の破片に、第2層から出土した2片を加えた、計19片を接合した土師器椀(図10-5・図版15)のみである。ただし、第2層に小片ながら坏と分かる口縁片もある。口縁端部が若干外反し、身部は比較的浅いと思われるものである。

厚手の土師器は第2層、1溝上・下層から出土したが、第2層の高坏8片以外は、全て壺片のようである。第2層のものはほとんど接合せず、頸部4片が接合し、1溝下層に同一個体片があったもののみである(図10-8・図版18)。

土師器壺頸部片では1溝下層出土の1溝土器1(図10-11・図版21)が、頸部が完周して残存し、他に1溝下層にはそれと似た文様構成の頸部片が3片あり(図10-9・図版19)、上述の頸部片と合わせると、3個体のものがある事が分かった。

土師器壺口縁片は1溝上・下層から出土し、全て垂下口縁加飾壺のものだが、上下両層間で接合するものが多かった。器壁の厚さ、口縁端部や屈曲の鋭さ、波状文の形態、波状文と円形附文の位置関係な

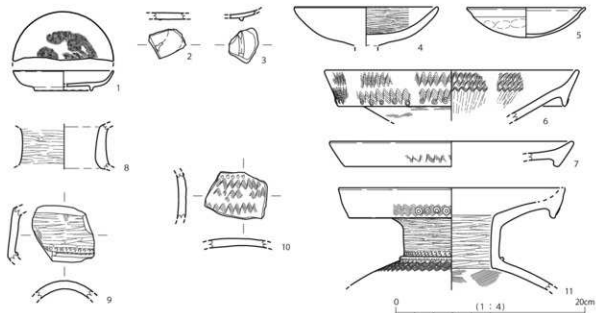


図10 出土遺物（1：表土、2～4：第2層、5：1溝上層、6～10：1溝下層、11：1溝土器1）

どから3種類に分別でき、1種類内でほとんどが接合し、3個体のものがあると分かった。

その内、1個体の口縁片が1溝土器1と接合した。そのため、残り2個体（図10-6・7図版16・17）も1溝土器1以外の頸部片のどちらかと同一個体と思われるが、組み合わせは判明しなかった。

ただ、土師器垂下口縁加飾壺の破片は、少なくとも3個体からのものが混じっているとは言える。

最も多かった壺胴部破片は、1溝下層の波状文のある1片が1溝土器1に接合した他は、ほとんど接合しなかった。胴部上半から中位付近と考えられる破片が多く、底部周辺の破片は皆無である。

各遺物

図10-1・図版11は、表土出土の磁器染付高台小皿片である。高台はケズリ出して、底部の厚さが高台外側より高台内がかなり薄い。高台端部は軸ハギ。口縁には鉄錆で口紅を施す。見込みの文様は毛彫りで描いた上にダム状に呉須を掛け絵柄を浮き出させる。絵柄は岩の上の柳、高下駄を履いた人物の袖などが残り、「～乃得」の字が見られる。

図10-2・図版12は、第2層出土の須恵器坏底部片である。残存率は10%以下で、内面回転ナデ、外面は回転糸切り後、回転ナデか。中央付近と思われる無調整部分も残る。飛鳥時代以降の平底の須恵器坏底部によく見られる、微少な粘土塊の付着が1個ある。胎土はN5/0灰色を呈し、砂粒は0.5mm強の石英・長石がわずかに見られる程度である。無高台の坏か。奈良～平安時代頃としか言えない。

図10-3・図版13は、第2層出土の土師器高台坏片である。残存率は10%以下で、内面磨滅、外面ナデ、高台は端部が磨滅するが、小ぶりの断面三角形のものである。胎土は7.5YR7/6 橙色を呈し、1mm弱の赤色粒・石英・ガラスわずかにあり。奈良～平安時代頃としか言えない。

図10-4・図版14は、第2層出土の土師器高坏坏部片である。坏部の残存率30%ほど。外面剝離・磨滅多く調整不明、内面はヨコミガキ、底部は一方方向の直線ミガキ。胎土は5YR5/6 明赤褐色を呈し、1mm前後の石英・チャートあり、1mm弱の長石若干あり、0.5mm強の赤色粒・ガラスわずかにあり。ミガキが入るのは古い要素だが、浅く開いた坏部の形態は布留式以降の椀形高坏で、古墳時代前期後半を遡らない時期のものであろう。今回の調査で出土した庄内式期の土師器垂下口縁加飾壺とは時期の異なる遺物である事に留意が必要である。

図 10-5・図版 15 は、1 溝上層出土の土師器碗である。残存率は 80%。内面磨滅するがヨコナデか。外面は口縁部に強いヨコユビナデ、体部はユビオサエ後不定方向ナデ。胎土は 7.5YR6/4 にぶい橙色を呈し、2~1mm の石英あり、長石若干あり、チャートわずかにあり。器壁はかなり薄い。土師器碗の系統で、法量が縮小し、坏・皿との区別が不明確になり、「て」の字状口縁の成立に影響を受けて口縁が外反した頃、9 世紀末葉~10 世紀初頭のものと思われる。

図 10-6・図版 16 は、1 溝下層出土の土師器垂下口縁加飾壺口縁部片である。口縁部周の 40%ほどが残存する。内面は磨滅激しいが波状文が残る。垂下する外面は上下二段の波状文と下端に円形浮文が並ぶ。円形浮文間の間隔は 6~4mm。口縁下半の大きく開く部分の外面はヨコハケ後ヨコナデ。胎土は 7.5YR6/6 橙色を呈し、2~1mm の石英あり、1mm 前後の長石若干あり、チャート・黒色砂粒わずかにあり。端部が図 10-7・11 より鋭く、波状文も図 10-11 より流麗である。

図 10-7・図版 17 も、1 溝下層出土の土師器垂下口縁加飾壺口縁部片である。口縁部周の 20%ほどが残存する。内外面剥離・磨滅激しく、調整不明。垂下口縁外面にわずかに波状文残る。胎土は 7.5YR6/6 橙色を呈し、3~1mm の石英あり、2~1mm の長石・チャート若干あり、1mm 前後の赤色粒・黒色砂粒わずかにあり。法量・断面形は図 10-11 に似るが、波状文の手癖は図 10-6 に似る。

図 10-8・図版 18 は、1 溝下層出土の土師器壺頸部片である。第 2 層から出土した 4 片が 1 溝下層の 1 片と接合した。頸部周の 70%ほど残存。内面はタテユビナデ・ユビオサエ後、板状工具によるヨコナデ。外面はヨコミガキ。胎土は 7.5YR5/4 にぶい褐色を呈し、3~1mm の石英あり、1mm 弱の長石若干あり、チャート・ガラスわずかにあり。残存部分に加飾はないが、図 10-6~11 と同じ形式の壺と推測される。

図 10-9・図版 19 は、1 溝下層出土の土師器加飾壺頸部片である。残存率は 10%以下、頸部周の 25%ほどが残る。内面ヨコナデ、外面タテハケ後ヨコミガキ。頸部下端に突帯を巡らし、その上面と直上に径 3mm ほどの竹管状工具を斜めに刺突し、逆「C」字状の刺突文を巡らす。胎土は 7.5YR6/6 橙色を呈し、内面は 10YR5/2 灰黄褐色で、1mm 前後の石英あり、長石・チャート若干あり、黒色砂粒・ガラスわずかにあり。破片上端は大きく外側に屈曲し、図 10-11 と同じような垂下口縁加飾壺の頸部であると思われ、図 10-6・7 のいずれかと同一個体の可能性が高い。

図 10-10・図版 20 は、1 溝下層出土の土師器壺肩部片である。残存率は 10%以下。外面で 1 列に並ぶ刺突文は頸部直下であろう。その下に磨滅するが波状文が残る。内面は左上がりのナメナデ。胎土は 7.5YR6/6 橙色を呈し、2~1mm の石英あり、1mm 弱の長石若干あり、0.5mm 強の輝石・ガラスわずかにあり。文様構成は図 10-11 の 1 溝土器 1 と同じだが、接合する余地はなく別個体である。

図 10-11・図版 21 は、1 溝土器 1 の土師器垂下口縁加飾壺である。口縁周は 30%ほど、頸部周は 100%残存している。口縁部は、内面剥離激しく、調整・文様とも不明、外面はヨコナデ後、下半に 1 帯 6 条の波状文を入れ、そこに 4 個 1 群の円形浮文を貼る。円形浮文群同士の間隔は 7.1cm である。4 個 1 群の円形浮文群が一周で 6 群配置されたものか。垂下した口縁の裏はヨコナデ、頸部からそこまでの大きく開く部分の外面は、頸部から続くヨコミガキである。頸部は内外面ヨコミガキだが、わずかにその下にタテハケが残る。頸部外面下端に突帯を付け、その上に径 3mm の竹管状工具を斜めに刺突し逆「C」字状にした文様を 2 条巡らす。上下の竹管文は整合し、「3」字状を成すが、上が下を切る。突帯の側面にも同じ工具による刺突が巡る。突帯直下の肩部にも三日月形の刺突文が 1 条巡るが、上と同じ工具を使用している可能性が高い。その下の肩部外面は波状文が入る。磨滅するが、少なくとも

も頸部から 6.8 cm の距離までは波状文が見られる。波状文は口縁部のものと工具幅・1 単位の条数、手癖が共通する。肩部内面は若干ユビナデ・粘土接合痕が残るが、右上がりのナナメハケである。胎土は 7.5RY6/6 橙色を呈し、1 mm 前後のチャート・長石・赤色粒あり、石英若干あり、ガラスわずかにあり。

庄内式期の土師器加飾壺は例数が少ない割に多様で、近畿中央部でも、摂津・河内・大和などの地域差や、細かい時期差を言える状況にはない。特に垂下口縁加飾壺はそうである。今回の 3 例は、胎土が一見近畿中央部の加飾壺によく見られる明るい橙色を呈するが、その中の砂粒は赤・青両色のチャートや赤色粒が多く、わずかに火山ガラスのようなガラスが混じる、北摂地域在土器によくあるものである。型式要素を加飾壺に限定して見れば、頸部下端の突帯は庄内式期初頭～中葉に多く、頸部が上下同径の筒状のものは庄内式期中葉～布留式期初頭にほぼ限定される。加飾が多様なのは庄内式期中葉～後葉が多く、口縁の垂下は庄内式期中葉から発達し、末葉に頂点となり、布留式期初頭には再び短くなる傾向がある。そこから類推すれば、今回の 3 例の垂下口縁加飾壺の時期は庄内式期後半頃と言うのが妥当であろう。

小結

1 溝下層を中心に出土した土師器壺片は、1 溝掘削時期の下限を示す。状況からほとんどが 3 個体の垂下口縁加飾壺のものと考えられる。底部付近の破片が皆無な事から、調査区外北側高所に掘えられたものが割れ、破片が 1 溝に流入したと考えられる。垂下口縁加飾壺は墓に供献される例が多い土器であり、1 溝は庄内式期の方形台状墓の溝である可能性が高いと言える。

1 溝上層から出土した土師器碗は、基本層序や遺構で先述した層位関係から、2 土坑掘削時期の下限を示す。1 個体で、歪みや磨滅が激しいが、平安時代前期のものと思われ、他の 1 溝上層・第 2 層に混じる須恵器坏片・土師器坏片とも矛盾はない。確認できる器種が碗環類に限られる単純な構成である事も注目できる。2 土坑が墓域に関連した遺構であれば、それらの碗環類も、その関連遺物と考えられよう。

第 4 章 総括

ここでは調査結果を踏まえ、時期ごとにそのまとめをしていきたい。

庄内式期の方形台状墓

1 溝が方形台状墓の根根を切断する溝で、主体部は調査区より北側高所の根根上にあると判断した。おそらく北側にもう一つ溝があり、二つの溝で一边 10m 弱の方形の区画を形成するものであろう。

方形台状墓は、丹後・丹波・但馬地域に、弥生時代後期に多く分布し、中国地方の弥生墳墓の影響を受けて成立したのと考えられている。しかしこの地域は、同時代山陰出雲地域を中心に流行し、北陸地域まで波及する四隅突出墳丘墓は受容しない独自性も持ち、弥生時代では稀有の規模の 36×39m の墳丘を持つ京都府京丹后市赤坂今井墳丘墓を出現させるまでになる。

今回の 1 溝から想定される方形台状墓は、周囲にテラスを形成する大型のものとは異なり、根根を幾つかの溝で切断し、複数の台状墓が一行に並ぶような類型の、小規模な台状墓であろう。

1 溝に伴う土師器垂下口縁加飾壺は、弥生時代後期末から布留式期初頭まで存在し、個体差が大きい。ため、型式により時期を限定するのは難しいが、頸部が円筒形で、加飾は波状文・円形浮文・竹管文を伴い、口縁下端が強く垂下する事などから、庄内式期後半に限定されよう。奈良県桜井市籬向古墳群中、

箸墓古墳より先行する罫向石塚古墳などと併行する時期のものと言える。

その時期に方形台状墓が摂津地域にありえるかを考えると、近畿中央部でも弥生時代後期の内に、京都府京田辺市田辺城下層墓など、丹後地域の影響を受けた墳墓が点在するので、問題はあまい。

また、隣接の安満山古墳群内の前期古墳である安満宮山古墳は、その墳丘形態に丹後地域の方形台状墓の影響が見られるという説もある。ならば、今回の調査は、安満宮山古墳被葬者の1～2代前に、この地域に丹後地域と関係の深い集団がいた事を示す可能性があると言える。

古墳時代後期の群集墳

今回の調査では、既往の調査で知られる後期群集墳としての梶原古墳群に関連する遺構・遺物は検出されなかった。しかし、標高80mを越える地点にも遺構が存在する事が判明した事と、調査区よりやや北側に行った地点で、古墳状隆起地形が3基ほど見られる事から考えると、梶原古墳群の範囲でさらに密に古墳が群集している可能性が考えられるように思う。

さらに前述の安満宮山古墳との関係や、後述する焼土坑での成合遺跡との関係からすれば、安満山古墳群を中心とし、北摂山地ポンポン山山塊南西部一帯が一つの古墳群と把握できる可能性もあろう。

平安時代の焼土坑

壁面と底面が被火赤変し、底面中央に炭層が遺存した2土坑は、火葬墓群内に存在する火葬施設と考えられる。時間的には、2土坑から流出した焼土塊・炭片を含む1溝上層に包含されていた土師器椀が、「て」の字状口縁成立期のものであって良いなら、9世紀末葉から10世紀初頭頃と考えられ、第2層出土の土師器環口縁片・高台坏片とも矛盾はない。

安満山古墳群の北西に位置する金龍寺旧境内跡と成合遺跡で平成23年から平成25年に行なわれた調査で、78基に及ぶ「焼土坑」の存在が報告されている。壁や底面が被火赤変しているA類と、埋土に焼土・炭化物を含むB類とに分類しているが、2土坑がA類、3ピットがB類に対応しよう。この2遺跡の焼土坑には鉄釘などが出土するなど、火葬墓と考えられるものもあるが、骨片・骨粉は検出されていない。立地としては尾根筋・斜面・谷筋いずれにも分布し、遺跡内全体に等質に分布していた可能性が高い。しばしば、A類とB類がセットのように近接してであると報告されている。調査者は骨器や骨の出土がないため、火葬墓や「火葬の際の火化遺構」と断定するのは慎重だが、火葬に関連した遺構の可能性は高いだろう。時期としては9世紀代から10世紀前半頃のものが多く思う。

2土坑及び3ピットは上述の「焼土坑」と同じ山塊で同時期にあり、同種遺構がこの山塊に広く分布している可能性が高いと言える。成合遺跡では梶原瓦窯の同范瓦も出土し、梶原寺跡から成合遺跡までの山城が、梶原寺の影響下に、一体のものとして利用されていた可能性も考えられる。

空白期としての奈良時代

今回の調査成果を追加しても、梶原古墳群では古墳時代から飛鳥時代まで遺構の形成が継続するが、その後平安時代まで、奈良時代頃の遺構・遺物が確認されていない。調査区でもこの期間、堆積が途絶えるのは、土砂の流出を防ぐような植生が回復したためと考えられる。梶原寺は存続して、東大寺創建瓦を供給しており、それを支える地域集団が消滅したとも考えられない。奈良時代の墓域が発見なだけか、この時代、他に移動していたのか興味深いところである。

その後

2土坑・3ピットの埋没以降も、4土坑・5ピットの形成が見られるが、その実態は不明である。調査区付近は、平坦な地形を保っていたようだが、やがて第1～2層が堆積する。再び人の手が入り、

植生が破壊されたのかもしれない。しかし、それらが無遺物層であるように、物を山林に持ち込むような開発ではなかったようである。おそらく、里山としての利用度が高まったのであろう。現在では調査区南西側に手入れの行き届いた竹林が広がり、南側には炭窯の跡と思われる、壁の直立する、半円形にえぐれた地形が残る。周囲の木々も、根元から二股・三股に分かれた、薪炭林らしい樹相を見せる。

結語

今回の調査は、狭い面積で、遺構の性格を完全には把握できないものであったが、梶原古墳群自体の性格をはじめ、この山域に分布する遺跡群の実態把握に一石を投じるような調査成果となったと言える。

今後、近接する遺跡との関係を考えていく上で、その一助となれば幸いである。

参考文献

- 原口正三 1973年『高槻市史』第6巻 高槻市役所
- 都出比呂志 1986年『墳墓』『岩波講座日本考古学4 集落と祭祀』岩波書店
- 古代学協会・古代学研究所編 1993年『平安京提要』
- 名神高速道路内遺跡調査会 1998年『梶原古墳群発掘調査報告書』
- (財)大阪府文化財センター 2006年『古式土師器の年代学』
- 福島孝則 2010年『卓状墓の展開 一丹後・但馬・丹波地域の独自の弥生墓制一』『京都府埋蔵文化財論集』第6集。(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- (公財)大阪府文化財センター 2013年『萩之庄南遺跡』
- (公財)大阪府文化財センター 2014年『成合遺跡・金龍寺旧境内跡2』
- (公財)大阪府文化財センター 2015年『井尻遺跡』

写 真 图 版



1、確認調査遺構検出状況（北東から）



2、調査区第3面（南から）

図版 2P.



3、調査区第3面（北から）



4、1溝全景（東から）



5、1溝断面（東から）



6、1溝土器1出土状況（南から）

図版 4P.



7、2土坑炭層検出状況（北東から）



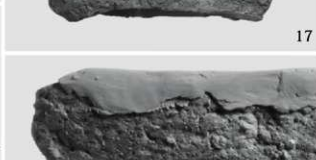
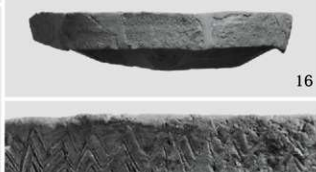
8、2土坑断面（南西から）



9、2 土坑完掘状況（南東から）



10、4 土坑（南西から）





19



20



21



21^a



21^b

報告書抄録

ふりがな	かじわらこふんぐん							
書名	梶原古墳群							
副書名	主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路側道工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第259集							
編著者名	三宮 昌弘							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 In072(299)8791							
発行年月日	2015年7月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
梶原古墳群	おとわらこふんぐん 大阪府 たかいつちし 高槻市 はぎのしんどうまち 萩庄地内	27207	31	34° 86' 51"	135° 64' 38"	平成27年3月2日～平成27年3月13日	49㎡	主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路側道工区）道路改良事業
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
梶原古墳群	墳墓	古墳	溝	土師器加飾二重口縁壺		方形台状墓の溝か		
	墓域	古代	焼土坑・ピット	土師器・須恵器		焼土坑は火葬施設か		
	不明	古代以降	土坑・ピット	なし		層位的に焼土坑より後		
要約	古墳時代後期の群集墳として知られる梶原古墳群であるが、今回の調査では尾根を切断するような直線的な溝が検出され、その溝の下層の包含遺物は、古墳時代初頭、庄内式期の土師器加飾二重口縁壺のみであった。この溝は方形台状墓のものであると考えられる。また、溝の横に、壁・底面が焼けた土坑が検出され、その埋土を侵食して堆積した溝上層に平安時代の土師器が包含されていた。この土坑は、火葬施設に伴う火葬施設の可能性がある。							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第 259 集

梶原古墳群

主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路側道工区）道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2015 年 7 月 31 日

編集・発行／公益財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号

印刷・製本／株式会社 近畿印刷センター

大阪府八尾市志紀町南 2 - 131 番地